



Title	福祉哲学の継承と再生 : 社会福祉の経験をいま問い直す
Author(s)	中村, 剛
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26235
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

〔 題 名 〕

福祉哲学の継承と再生

—社会福祉の経験をいま問い直す—

学位申請者

中村 剛

小倉襄二、岩下壮一、阿部志郎、糸賀一雄など、限られた人たちによってではあるが、社会福祉を根本から問い直す「福祉哲学」という営みが行われてきた。しかしながら、その哲学が継承されることなく、哲学を喪失しかけたなかで社会福祉政策が策定され、社会福祉実践が行われている。そして、社会福祉研究が行われている。一方で、社会福祉という営みは巨大なシステムとなり、システムの中にいる人たちは、システムが定めるマニュアルや手順に沿って行動するようになっていく。そして、物事を根本から問い考えることをしなくなっている。しかしながら、グローバル化が進化するなか、非正規職員、過労、失業、多重債務、虐待やドメスティックバイオレンス、自死など、人が大切にされない状況が拡大し深刻化しており、いまこそ、社会福祉を根本から問い直す「福祉哲学」が必要な状況にある。

では、どうすれば福祉哲学を継承し、それを再生する形で「福祉哲学」をすることができるだろうか。これが本研究における問いである。この問いに対して、福祉哲学の枠組みとプロセスに関する仮説を提示し、それに基づき自ら福祉哲学を行い、その妥当性を検証することが本研究において用いる方法である。そして、仮説の妥当性を検証することで福祉哲学を継承し、それを今日において再生することが本研究の目的である。この目的を達成するために、本書では第Ⅰ部「福祉哲学の生成」、第Ⅱ部「福祉哲学の実践」、第Ⅲ部「福祉哲学がもたらすもの」という3部構成により思考を展開する。

第Ⅰ部「福祉哲学の生成」では、まず第1章において「このような枠組みとプロセスに基づけば、福祉哲学を継承した形で福祉哲学をすることができ、かつ、福祉哲学を再生することができる」という仮説を提示する。それは以下の通りである。

「福祉哲学の枠組みとプロセスは、社会福祉の経験を巡って、社会福祉の現実に向ける（見るべきものを見る）→その現実の中で声なき声を聴き、その声に応える形で問い考える（呻きに応える）→原理や本質など社会福祉において大切なことを言葉にする（一例として「この子らを世の光に」）→社会福祉の経験……という思考の循環運動のなかで、社会福祉の経験を学び直すことである」

この仮説に示されている通り、福祉哲学の中核には社会福祉の経験があり、本研究は筆者自身の社会福祉の経験を基盤としている。社会福祉の経験を中核としつつ、福祉哲学は“見るべきものを見る”ことから始まる。ここでいう“見るべきもの”とは、“人としての尊厳が剥奪されているような状況”であり、社会福祉が対応しなければならぬ状況である。第2章は、この“見るべきもの”を幾つか取り上げた上で考察を加える。見るべきものの中に身を置いたとき、そこには眼差しが示す懇願、体や行動が示す拒否、あるいは呻きといった声にならない声、声なき声が発せられていることに気づく。そこには「なぜ」「どうして」という問いも潜んでいる。この声に情動性（共感や怒り）を伴った形で応答するとき、福祉哲学という独自の思考が立ち上がる。第3章ではその場面と瞬間を捉える。そして、そこで生じる問いと思考について論じるなかで、福祉哲学においては、社会福祉の原理に関する問い、社会福祉の目的に関する問い、そして、社会福祉の本質に関する問いが提示されることを確認する。

第Ⅱ部「福祉哲学を実践する」では、社会福祉の原理、目的、本質といった福祉哲学の問いについて哲学する（根源から考える）。これらの問いを考えるためには、社会福祉の本質について考えていた福祉哲学の先覚者からの学びが不可欠である。筆者は小倉襄二と阿部志郎の福祉哲学／福祉思想に出会うことで、「これが社会福祉なんだ」と心底納得する経験をした。それ以来、福祉哲学の問いについて考えるときは、常に2人の福祉哲学／福祉思想が意識の底にあり、問いの内容によっては、2人の著書を読み直し考えていた。そのため第4章「先覚者からの学び」では、本研究において福祉哲学の問いを考えていく上で、筆者が常に参照することとなる小倉襄二と阿部志郎の福祉哲学／福祉

思想を整理する。ここでの整理と考察は、社会福祉の本質を考える上での根拠となる。

さらに、福祉哲学の問いを考えるためには、社会科学・実践哲学・文学からの学びが不可欠である。まず必要なことは、歴史・社会の中に常に存在し続ける“人を人とも思わぬ状況”とその状況を生み出している力、規範、仕組みを事実として理解することである。そのために、第5章第1節では社会科学からの学びを整理する。次に、明らかにされた事実を前にして、社会福祉はどうしなければならないのかを考える必要がある。その際に参考になるのが正義や自由に関する実践哲学における知見である。そのため第5章第2節では、ロールズ、セン、デリダの正義に関する考え方、および、バーリン／シュクラ／マルガリート／イグナチエフの自由や人権に関する考え方を整理する。また、人間をどのように理解するのかは社会福祉の生命線であり、福祉哲学において絶えず問い考え、理解を深めていかなければならない。そのため第5章3節ではブランショの文学に対する考え方を学んだ上で、エリスン『見えない人間』とブルーストの『失われた時を求めて』を取り上げ、そこから人間に対する理解を深める。この第5章における整理と考察は、社会福祉の目的や本質を考える上での根拠となる。

第4章と第5章は具体的な問いを設定し、その問いについて考えるのではなく、社会福祉の本質や目的を考える上で必要となる知識の整理を行っている。これに対して、第6章と第7章では具体的な問いを設定し、それに応える形で議論が展開する。第6章では「筆者が福祉現場で感じた『声なき声』と『それに応えるように促す力』とは何であるのか」という問いを、現象学に基づく事象分析を通して考える。この問いを考えるために第1節では、「福祉哲学の問いに直面した人が、その問いを考えていく上で参考になる思考の仕方」という観点から、現象学という方法の概略をまとめる。続く第2節では、村上靖彦が現象学の方法を用いて事象分析することで明らかにした、対人関係という事象が成り立つ仕組みや働きを、他者を支援するという事象に直接関係すると思われる点に絞りその内容を整理する。ここで村上が第3の志向性として導入した視線触発が、筆者が福祉現場で聴いた（感じた）「声なき声」の経験を解明する鍵となる。第3節では、第1節と第2節にまとめた内容をもとに、筆者が経験した他者を支援するという事象の分析が試みられる。この章における考察は、福祉哲学の問いを、現象学を用いて考えることの実例を示すとともに、社会福祉の原理を超越論的次元において理解する可能性を示すものである。

第7章では、「私（筆者）が福祉現場で聴いた（感じた）声なき声は何であるのか」「単なる知識ではなく、福祉への関心を喚起し、行動へと駆り立てるような次元における福祉の理解はどうすれば可能か」「福音から福祉思想が学ぶべき点は何か」といった問いについて、対話という方法を用いて考える。対話の相手は、釜ヶ崎という“見るべきところ”に身を置き、日雇労働者から学びながら『聖書』を原典にあたり読み直している本田哲郎神父である。この対話により、この世界にはギリシア哲学・文化のロゴス（言葉・論理）とは異なるダブル（いのちの言葉・論理）があるということを学ぶこととなる。ダブルとは出来事、存在、行いや生き方、眼差し、呻きなども含む言葉であり、福祉哲学とは、このようなダブルに触発され生じる思考であるという見解が示される。さらに、この対話を通して「福祉思想の根幹には福音がある」という仮説が提示される。

第Ⅲ部「福祉哲学がもたらすもの」では、第Ⅱ部の考察の結果得られたことを示す。第8章「社会福祉とは何か―社会福祉における経験の学び直し」では、第4章から第7章までの学びと考察を踏まえ、社会福祉の原理、目的、本質について学び直したことを、可能な限り根源的かつ体系的に整理して示す。第1節では、第Ⅱ部における考察を根拠にして、社会福祉を根源から理解するために必要な分析枠組みを示す。まず、社会福祉を根源から理解するためには、①メタノイア（見るべきものを視る）、および超越論的次元と経験的次元を分析・解明できる視点が必要であることを確認する。次に、それぞれの視点に立ち現れる世界は間主観性によって構成されることを示す。その上で、超越論的次元と経験的次元を媒介し、かつそれらの次元が相互浸透している生活世界こそが社会福祉を根源から理解する上での基盤となることを示す。そして、ここまでの考察を踏まえて、社会福祉を根源から理解するために必要な分析枠組みを示す。第2節では、他者を支援するという事象の分析（第6章）と本田神父との対話（第7章）における考察を根拠に社会福祉の原理を、第3節では、社会科学・実践哲学・文学からの学び（第5章）における考察を根拠に社会福祉の目的を明らかにする。そして、最後の第4節では、本書におけるこれまでのすべての考察を踏まえ、社会福祉の本質を明らかにする。

終章では、第1章で提示した仮説、すなわち、このような枠組みとプロセスに基づくならば、福祉哲学を継承した形で福祉哲学を再生することができるという仮説の妥当性を検証する。そして最後に、今後の研究課題と方向性を整理する。研究課題については、①他領域からの学びと対話、②現象学を学ぶ／現象学者と共に、③福祉哲学と福祉思想のさらなる継承、④多様な視点／立場から福祉哲学をする、⑤見るべきものを視つづける、という5つの観点から整理する。そして今後の方向性については、①社会福祉学の構築、②対話の場／機会を創出する、という2つの観点に分け整理して示す。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (中 村 剛)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	浜渦 辰二
	副 査	大阪大学 教授	中岡 成文
	副 査	東京福祉大学 教授	秋山 智久
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 福祉哲学の継承と再生

—社会福祉の経験をいま問い直す—

学位申請者 中村 剛

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 浜渦 辰二

副査 大阪大学教授 中岡 成文

副査 東京福祉大学教授 秋山 智久

【論文内容の要旨】

本論文は、社会福祉を根本から問い直す「福祉哲学」が、かつて限られた先駆者によって断片的に行われながら、継承されることなく今日に至っている状況のなか、それを継承し再生し体系化しようとする、意欲的・挑戦的な研究である。全体は、3部9章から構成され、目次・本文・文献表を含めて、A4判で全334ページに及ぶ。

序章では、福祉哲学の枠組みとプロセスに関する仮説を提示し、それに基づき自ら福祉哲学を実行し、その妥当性を検証するという、本研究の問いと方法と目的を概観している。

「福祉哲学の生成」と題された第Ⅰ部において、第1章では、「福祉哲学の枠組みとプロセスは、社会福祉の経験を巡って、社会福祉の現実に目を向ける→原理や本質など社会福祉において大切なことを言葉にする→社会福祉の経験……という思考の循環運動のなかで、社会福祉の経験を学び直すことである」という仮説を詳しく提示している。

第2章では、福祉哲学の前提条件として「見るべきものを見る」ことの必要性を、アウシュヴィッツとハンセン病という歴史から、また、児童虐待やいじめ、世界中にある飢餓や人身売買といった国内外の具体的な現実を取り上げながら、呻きという声なき声に突き動かされるところに、福祉哲学が立ち上がる場面を確認している。

第3章では、この呻きに応えるところに生じる問いと思考について論じるなかで、社会福祉の原理に関する問い、その目的に関する問い、その本質に関する問いが、狭義の福祉哲学として立ち上がって来るプロセスを追っている。

「福祉哲学を実践する」と題された第Ⅱ部において、第4章では、社会福祉の本質について考えていた福祉哲学の先覚者からの学びとして、小倉襄二と阿部志郎の二人を取り上げて、それぞれの福祉の実践、福祉哲学、福祉思想の原理・理念・本質を整理している。

第5章では、福祉哲学の問いを考えるためには、社会科学、実践哲学、文学からの学びも不可欠とし、それぞれから学ぶことを整理している。社会科学からは、歴史・社会のなかに常に存在し続ける「人を人とも思わぬ状況」とその状況を生み出している仕組みを事実として学ぶ必要があり、実践哲学からは、ロールズ、セン、デリダ、イグナティエフらの正義や自由や人権に関する考え方を学ぶ必要があり、文学からはエリクソン『見えない人間』とプルースト『失われたときを求めて』を取り上げ、そこから人間に対する理解を深める必要を説いている。

第6章では、哲学からの学びとして、著者が福祉現場で感じた「声なき声」と「それに応えるように促す力」とは何であるのかという問いを、現象学に基づく事象分析を通して考察している。福祉哲学の問いを、現象学を用いて考えることの実例を示しながら、とくに、他者を支援するという事象に直接関係すると思われる点に絞って、分析を行っている。

第7章では、宗教学からの学びとして、「声なき声」とは何であるのか、単なる知識ではなく、福祉への関心を喚起し、行動へと駆り立てるような次元における福祉の理解はどのようにすれば可能かという問いについて、本田哲郎神父との対話によって明らかにしようとしている。

「福祉哲学がもたらすもの」と題された第Ⅲ部において、第8章では、これまでの考察を踏まえ、社会福祉の原理、目的、本質について学び直したことを、可能な限り根源的かつ体系的に整理して示している。そして、終章では、第1章で提示した仮説が、福祉哲学を継承した形で福祉哲学を再生することができるという、その妥当性を検証して示している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、臨床哲学の精神を福祉という場面において展開したもので、著者自身の19年間にわたる知的障害者施設職員としての体験を踏まえながら、また、現在も福祉大学の教員として学生たちとともに現場に関わりながら、同時に広い範囲に及ぶ文献研究にも取り組み、絶えず理論と実践とを往復してきた研究と言える。

社会福祉学の分野の審査員からも、社会福祉原論が希薄化し、制度の解説や援助の技術ばかりが重視されるなか、福祉哲学を体系化するという、これまでになかったオリジナリティをもつもので、しかも、現場から作り出してきた理論として暖かいまなざしと痛みへの共感が感じられる研究との評価を得た。

繰り返しが多いという叙述上の問題や、多くの参考文献を引用したり紹介したりしながら、それに対する著者自身の批判的考察が不十分だったり、社会福祉を論じてグローバリゼーションの議論をしながら、ノーマリゼーションにはまったく触れないのはどうかといった意見もあり、現象学の視点の問題や福祉国家の問題など、これからの課題として残されているところもあるという指摘もあった。

とはいえ、これらの点は、臨床哲学の精神から、みずからの体験を踏まえつつ福祉哲学を体系的に展開したという本論文の価値を減じるものではない。本論文の成果は、今後の福祉哲学研究が踏まえるべき重要な必読文献となることは疑いない。よって、本論文を、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。